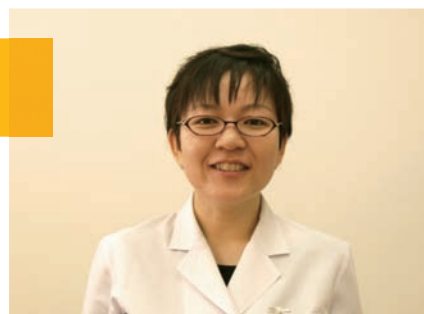


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第5回

株式会社ファーマシイ 山根暁子



「あなたが、家族をまとめて、お祖父さんを送るのよ」

ある男性看護師が、危篤のお祖父さんを在宅で看取ることを決めた。家族を説得し、在宅医の門を叩き、仕事は休みをとって、お祖父さんを家に迎え入れた。

無事退院したもののお祖父さんは下顎呼吸も始まり、“その瞬間”はいつ来てもおかしくない状態。在宅医は初回カンファで家族と医療チームの皆に「短期決戦になります」と喝を入れた。死のインフォームドコンセントが始まった。今後起こりうる体の変化などをドクターが説明していく中で、訪問看護師さんが男性看護師に言ったのが冒頭の言葉。2人は初対面だったけれど、彼は身内の命が消えるという衝撃の中でも先輩ナースの言葉をしっかり受け止め、自らの職能を果たした。お祖父さんは退院の翌日、親族ににぎやかに見守られて亡くなった。

「今までたくさんの患者さんにお世話になりました。今度は私がお返しする番です」

積極的ながん治療が叶わなくなり、在宅緩和ケアを選択した元看護師長さん——これは、訪問看護師さんから学生同行のお願いをされたときの彼女の言葉だ。自分の痛さやしんどさよりもケアスタッフに気を使う優等生の患者さんだった。

今生のお別れ間際に握りしめてくださった手の感触と死を覚悟したうえでの「ありがとうございます

ました」という声音は今も忘れられない。

近くで働く機会を得て以降、看護師という職種への尊敬は深まるばかりだ。患者さんの前では泣かない。共感がケアになるときを除いては不安そうな顔や悲しそうな顔は見せず淡々とケアする。喜びの気持ちはどんどん増幅させる。

在宅チームの力が足りず再入院する患者さんにつき添って病院に入り、患者さんと別れたあとで目に涙をにじませつつも、押し殺した声で担当ドクターに今の病状を冷静に説明する姿。

看護師の皆さんが共通に持つ社会的使命感、合理性、ヒューマニズムに、正直、私たち薬剤師は遠く及んでいないと思う。患者さんに寄り添い、支え、法が追いついていない部分にも使命感から仕事の枠を広げ、その実績から職域を拡大している技能集団。

看護師が意識の高い人たちだけ一枚岩だとは言わないが、「看護師」を生業とする人に私は無条件に尊敬の念を持つ。

私は患者さんの枕元でのお行儀を、共働する看護師さんたちの背中を見て教えてもらっているのだと思う。

出しゃばりすぎず、でも必要時には的確にサポートをする。病の人とその家族が主役になるケアについて言葉で表現すると薄っぺらく、嘘くさくなってしまいう行為を体現している人たちに囲まれて、日々仕事をさせてもらっている。